

テンプス



TEMPUS

2009年(平成21年) **36**号



も く じ

貝塚をはしる鉄道 水間鉄道

展示会のお知らせ

ふるさと 知っとこ! 館企画展2 「水間鉄道いまむかし」

「名越 安養寺の証講」が大阪府の「記録作成の
措置を講ずべき無形の民俗文化財」へ

現地見学会のお知らせ

第1回(岸和田藩七人庄屋)要家住宅見学会

古文書講座

平成20年度の埋蔵文化財調査

貝塚御坊願泉寺の平成大修理



※表紙の車両の写真はすべて歴代の水間鉄道の車両です。

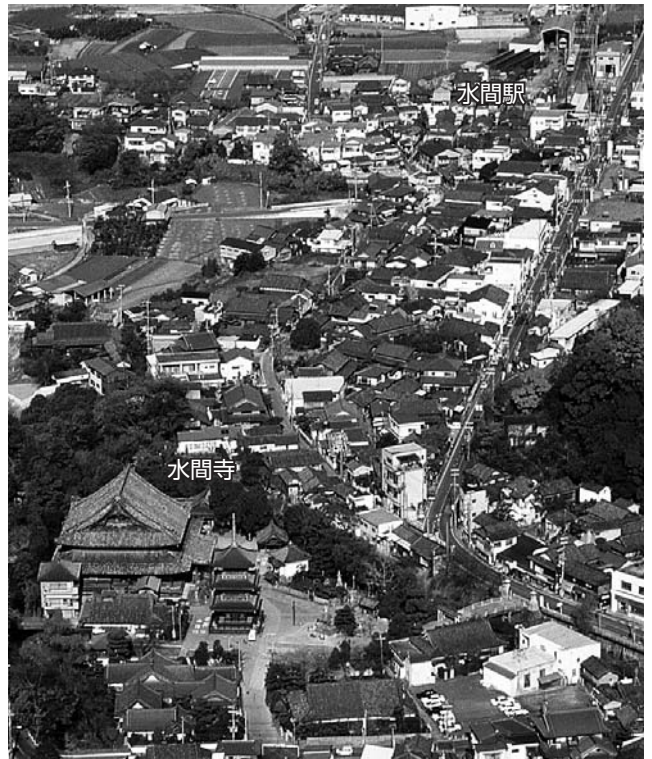
貝塚をはしる鉄道 水間鉄道

水間鉄道は、貝塚市水間に所在する水間寺の参詣と沿線地域の発展を目的として建設された鉄道です。

明治30（1897）年9月、南海鉄道株式会社により大阪の難波と貝塚間が結ばれ、明治36（1903）年3月には和歌山市駅まで全面開通し、貝塚市内から大阪・和歌山両方面への連絡はきわめて便利になりました。しかし、当時の海岸部と内陸部との交通は貝塚と水間を結ぶ馬車の便がようやく開通した程度でした。

この馬車に代わる大量輸送可能な交通手段として、水間鉄道の建設を考え出したのは西葛城村馬場（現在の貝塚市馬場）出身の川崎覚太郎という人物です。川崎氏は南海鉄道（現南海電鉄）に勤務時代、水間寺参詣の利便性と沿線地域の発展を考え、岸和田から水間までを結ぶ鉄道の建設を提案しました。大正2（1913）年、本格的にその予備調査に取りかかり、同年12月には有志らとともに「水間軽便鉄道株式会社」の名前で設立趣意書を作成しました。その後、鉄道計画は二度の中断を乗り越えて、9年後の大正11（1922）年4月に改めて動き始めました。この時、当初の計画とは異なり、麻生郷村海塚と木島村水間を結ぶ路線に変更されました。大正12（1923）年8月には「水間蒸気鉄道株式会社」の名前で鉄道敷設免許が下付され、翌13年4月には創立総会が開かれ、将来の電力化を見すえて社名を「水間鉄道株式会社」に決定しました。

大正14（1925）年12月、第1期工事区間である貝塚南駅〔のち海塚駅、昭和47（1972）年廃止〕－名越駅間3kmが開通、翌年1月、第2期工事区間である名越駅－水間駅間2.3kmが開通して当初の計画であった水間鉄道5.3kmが完成しました。その後、昭和9（1934）年1月には、それ以前に



水間寺と水間駅
（写真提供：水間鉄道株式会社）



石才駅（昭和29（1954）年6月）
車両は1953年に尾道鉄道から購入された55形
車両（1970年まで運用）です。



貝塚市役所前駅竣工式（昭和42（1967）年7月）
車両は1958年および1962年に新造された250形
車両（1972年まで運用）です。

貨物営業のみであった南海貝塚駅への乗り入れが実現し、貝塚南駅－貝塚駅間の旅客営業を開始し、現在と同じ5.5kmが全通しました。

開通当時の貝塚市域は貝塚町、麻生郷村、島村、北近義村、南近義村、木島村、西葛城村の7つの町村に分かれていましたが、当時の有力者たちを中心に、町村の枠を超えて多くの人びとがこの鉄道計画に賛同した結果、水間鉄道が建設されたのでした。開通以来、水間鉄道は日常生活の身近な交通機関として、通勤・通学や水間寺への参詣・観光などで多くの人々に利用されており、海岸部と内陸部を結ぶ唯一の鉄道として、なくてはならない存在となっています。

【参考文献】『泉州文化資料』第14巻第11号・12号、『泉州百年史 第貳巻』、『水間鉄道50年のあゆみ』、『水間鉄道70周年記念 新生水鉄のあゆみ』

登録有形文化財 水間鉄道水間駅舎

所 有 水間鉄道株式会社
時 代 大正15（1926）年
構 造 鉄筋コンクリート造平屋建
登録年月日 平成11年2月17日



水間鉄道水間駅舎

水間駅舎は、水間鉄道の終着駅として、大正15（1926）年に貝塚市（当時は木島村）水間の現在地に建設されました。当時この地域では珍しい鉄筋コンクリート造で、外観は水間寺参詣を意識した塔婆（とうば）風で、部分的に曲線を用いたほぼ左右対称の構造とするなど当時流行していた洋風のデザインが取り入れられています。平成12（2000）年には第1回「近畿の駅百選」の認定駅にも選ばれています。

展示会のお知らせ

ふるさと 知っとこ！館 企画展2
「水間鉄道いまむかし」

水間鉄道の80年あまりのあゆみを写真（表紙の写真を含む）や関連資料をもとに紹介します。



正月用ヘッドマーク

期 間 平成21年1月17日(土)～3月15日(日)

会 場 ふるさと 知っとこ！館
(貝塚市歴史展示館)

観覧料 無料

休館日 毎火曜日、2月11日(水)・(祝)



50周年記念乗車券

「名越 安養寺の鉦講」が大阪府の「記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財」へ

本市名越（なごせ）の安養寺（あんようじ）に伝わる双盤念仏（そうばんねんぶつ）〔鉦講（かねこう）〕が平成21年1月16日付けで「名越 安養寺の鉦講」として、大阪府の「記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されました。

双盤念仏は双盤（鉦）を叩きながら念仏を唱える仏教行事です。平成19年、大阪府とともに詳細調査を行い、その内容については『テンプス第31号』で詳しく紹介したところです。

泉州南部地域には安養寺をはじめ、阪南市の瑞寶寺（ずいほうじ）・黒田寺（くくでんじ）・祐道寺（ゆうどうじ）・宗福寺（そうふくじ）・西光寺（さいこうじ）の6カ所において、双盤念仏（鉦講）が伝承されています。このうち瑞寶寺の双盤念仏については、平成19年度に大阪府の「記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択を受けています。今回は瑞寶寺を除く全ての双盤念仏について、「記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の答申がなされました。

これらの双盤念仏は節まわしや鉦の打ち方、全体の構成など、大枠では類似していますが、それぞれ独自性が強く、長い年月を経て各地で独自の変化を遂げたものと考えられます。



名越 安養寺の鉦講

大阪府下では、戦時中の金属不足による双盤の供出や戦後の後継者不足により、このような双盤念仏の伝承はほとんど途絶えたものと思われ、現在まで伝承されているというのは、非常に貴重であるといえます。

この選択により、貝塚市内では「貝塚市東盆おどり」、「三ツ松の明土行念仏」に続く「記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財」となりました。

現地見学会のお知らせ

第85回 かいづか歴史文化セミナー

第1回（岸和田藩七人庄屋）要家住宅見学会

要家（かなめけ）は貝塚市畠中に所在し、中世土豪の系譜を引き、江戸時代には岸和田藩の七人庄屋を務めた旧家です。約7,000㎡の同家敷地は畠中集落の中心にあり、岸和田城下有数の庄屋屋敷の趣を現在に伝えています。今回の見学会では、広大な敷地内に残る建造物や泉水庭園などを見学します。

日 時：平成21年3月8日(日) 午後1時～

集合場所：貝塚市役所 本庁玄関前

案 内：青山賢信氏（大阪工業大学名誉教授）

定 員：30名（応募者多数の場合は厳正なる抽選を行います）

申込方法：往信用はがき裏面に必要事項〔①住所、②氏名（ふりがな）、③電話番号〕を、また返信用はがき表面に宛先を明記の上、下記申込先まで往復はがきにてお願いします。

※障害をお持ちの方はお電話での申し込みが可能です。

※1枚のはがきによる複数名の申込みは不可とさせていただきます。

※切：2月25日(水)（当日消印有効）

〈申込先〉〒597-8585 貝塚市畠中1-17-1 貝塚市教育委員会 社会教育課「要家見学会」係

古文書講座

◆「古文書にみる雨ごい—水と人びとの結びつき—」

平成20年10月18日(土)から5回にわたり、「古文書にみる雨ごい—水と人びとの結びつき—」と題して古文書講座を開催しました。講座では、要家文書から、雨ごいに関する記述を抜き出し、それをテキストにして解説を進めました。

明和2（1765）年6月、晴天が続く、農業用水が不足し始めたため、畠中村では村の氏神へお参りして、雨ごいをおこないました。幸いなことに翌朝から雨が降り、この年は水不足に陥ることはありませんでした。しかし、翌年7月の水不足は深刻なものでした。稲の生育に重要なこの時期に2週間近く雨が降らず、近木庄地域の水がめである永寿池も底をつき、池の中の魚をすくい上げることができるようでした。雨ごいは氏神だけでなく、雨降らしの神とされた「高竈（たかおかみ）神」「八大龍王」を祭神とする脇浜の高竈神社や葛城山（こちらにも正式には高竈神社）、熊取の雨山（あめやま）神社、「雨降明神」とも言われた意賀美（おかみ）神社、などの岸和田藩内のご利益（りやく）があるとされる神社にも村々からお参りに出かけました。

しかし、一時的に雨が降ることはあったものの、7月中は池に水が溜まるほどの雨量ではなく、水不足は深刻の度合いを増していきました。北近畿地域のかんがい用水の一つである件井（くだんゆ）で水争いが起こるなど、当時の日記からは人びとの生活の困窮ぶりが伝わってきます。8月4日の夜、ようやく待望のまとまった雨が降り、水不足を脱します。人びとは雨が降ったことを感謝

して、神社の前で踊ったり、石灯籠を修復し、大般若経（だいはんにゃきょう）を納めました。とくに今回は神社の屋根の葺き替えを藩に願い出ているほど、その喜びは大きいものでした。また、岸和田藩主も今回の水不足の深刻さに対して、京都にある北野天満宮や神泉苑（しんせんえん）、貴船神社などの雨乞いにご利益があるとされる神社へ家臣を代参させ、そこでもらった御加持水（おかじすい）や御洗米（おあらいまい）などの品々を領民たちに配っています。このように古文書を通して領主・領民ともにこの水不足を乗り切ろうと雨ごいに力を注いでいたことがわかりました。講座の参加者の方々からは、「身近な土地の雨礼・雨ごいの話で興味が持てた」「今回の雨ごいの話はシンプルな内容でわかりやすかった」といった感想が寄せられています。

今日では農業用水の需要もかつてほどではなく、大規模な水不足は少なくなっています。しかし、地域では今なお雨ごいの行事は続いており、岸和田藩主の手厚い保護を受けていた葛城山の高竈神社で行われていた雨ごい踊りは、葛城踊りとして受け継がれています。水と人びとの結びつきは今なお切っても切れないものです。



葛城山 高竈神社



永寿池

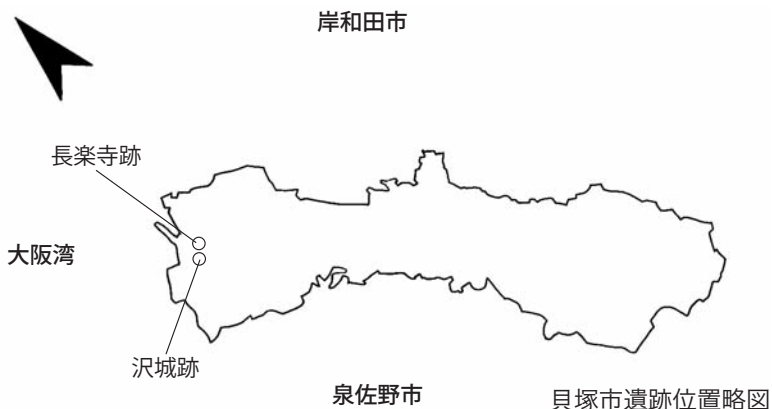
平成20年度の埋蔵文化財調査

平成20年度の発掘調査は12月末日現在、遺跡内の確認調査を26地点、遺跡範囲外の試掘調査を11地点行いました。

遺跡内の調査では、沢遺跡、沢城跡、加治・神前・畠中（かじ・こうざき・はたけなか）遺跡、新井・鳥羽北（にい・とばきた）遺跡、麻生中遺跡、森下代（もりしもだい）遺跡、森B遺跡において中世の農地に伴う溝や鋤溝を、海塚（うみづか）遺跡、木積観音寺跡では中世の遺物包含層（土器などを含む地層）を発見しました。また、半田遺跡では、古代の遺物包含層と掘立柱建物と考えられる柱穴などを発見しました。

遺跡範囲外の調査では、中世の遺物包含層を発見し、地蔵堂遺跡（堤所在）と高井天神廃寺・高井城跡（名越所在）の遺跡範囲を拡張しました。

今回のテンプスでは、今年度を実施した沢城跡と平成19年度3月に実施した長楽寺の発掘調査の成果について紹介します。



●土器を納めた土坑（穴）を発見！！

沢城跡の調査（沢所在）

個人住宅の建替え工事に先立ち、発掘調査を実施し、中世後半の鋤溝、溝、柱穴、土器を納めた土坑（土器埋納土坑）を発見しました。

発見した鋤溝と溝は、農地に伴うものであり、柱穴と土器埋納土坑は、掘立柱建物（集落）に関連する遺構と考えられます。

この発見により農地（鋤溝・溝）から集落（柱穴・土坑）へと土地の利用が移り変わったものと推測されます。

発見した土器埋納土坑には、土師器（はじき）小皿5点が納められていました。土師器小皿を土坑に納めていることから地鎮（じちん）にかかわる可能性があります。地鎮とは、土地の開発や建物を建てる前に土地の神を鎮める儀式であり、現在でも土木工事などの無事を祈る儀式として執り行われています。

この土坑は、意図的に小皿を埋納したと考えられ、建物を建てる際に地鎮の儀式を行ったものと推測されます。

貝塚市内における土器埋納土坑は、今回の沢城跡のほかに加治・神前・畠中遺跡、地蔵堂遺跡においても同時代の遺構が発見されています。



沢城跡（調査区全景）



土器埋納土坑（沢城跡）

●寺院の濠？を発見！！

長楽寺跡の調査（脇浜所在）

西小学校の体育館建替え工事に先立ち、発掘調査を実施しました。

今回の調査では、人が生活する以前に形成された自然流路や古墳時代後期の溝、土坑、中世の濠跡などを発見しました。

中世の濠跡は、2条（南東―北西方向の濠1・2）あり、その規模は、幅1.5m、深さ約1mです。断面形状がU字もしくはV字状であり、排水などを目的とした溝としては規模が大きいことから濠跡と考えられます。また、北西方向にのびる濠1は、調査区西部で北方向に折れ曲がり、濠2につながります。

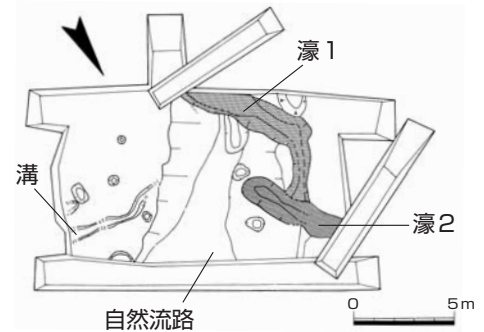
濠跡の埋土からは、大量の礫（れき）とともに瓦、瓦質甕、土師質・瓦質羽釜、青磁碗、備前焼のすり鉢などが多数出土しています。

濠より出土した遺物からこの濠は中世に掘削されたものであり、埋土の観察により、中世後期に一度に埋め戻されたと考えられ、中世の遺物とともに平安時代の瓦も含まれていました。

調査地周辺では「長楽寺ハタ」、「長楽寺山」などの小字名が確認できることから平安時代後期に創建されたとされる長楽寺が存在していたと推定しています。

今回の調査では、柱穴や礎石など寺院の建物に関わる遺構は発見されませんでした。大量の瓦が出土した濠跡は、寺院に関連する遺構の可能性があります。

これらの発見により、西小学校およびその周辺において平安時代の寺院が存在していた可能性が高くなり、寺域を考えるうえで貴重な発見となりました。



長楽寺跡（調査区平面図）



長楽寺跡（調査区全景）



濠1（長楽寺跡）

遺 跡 名	調査 件数	調査面積 (㎡)	遺 跡 名	調査 件数	調査面積 (㎡)
沢 城 跡	2	40.95	堀 秋 毛 遺 跡	1	6
沢 遺 跡	1	15.6	麻 生 中 遺 跡	2	25.5
沢 西 遺 跡	1	6	半 田 遺 跡	1	7.1
沢 共 同 墓 地 遺 跡	1	27	地 蔵 堂 遺 跡	2	19
明 楽 寺 跡	1	16	森 下 代 遺 跡	1	39.5
新 井・鳥 羽 北 遺 跡	1	108	森 B 遺 跡	1	12
新 井 ノ 池 遺 跡	2	45	木 積 観 音 寺 跡	2	12.8
海 塚 遺 跡	1	7.2	遺 跡 外	11	514.75
加 治・神 前・畠 中 遺 跡	6	214.5	合 計	37	1116.9

平成20（2008）年度発掘調査一覧表（12月末日現在）

貝塚御坊願泉寺の平成大修理

本堂の解体修理事業は、瓦の葺き替え・小屋組み・床組みなどの修理が終わり、平成17年に建設された本堂の素屋根（工事用覆屋）は覆屋としての役目を終え、平成20年10月後半より解体作業が始まりました。



素屋根の外壁を取り外しています

から携わっている作業員のおかげで作業は滞りなく安全に行われました。

無事に素屋根の解体を終えた本堂は、17世紀中頃の建立当時を彷彿とさせる美しい姿になっています。

今後は、彩色など本堂内部の修理工事へと移ります。この修理事業は、表門、築地塀の修理を含め平成22年まで続く予定です。



解体が終わり本堂が姿を現しました

素屋根は、長期間の修復作業中、風雨などから本堂を保護し、作業スペースや足場などを確保するために設けられており、本堂全体を覆う必要があるため、その規模は東西約42m、南北約45m、高さ約20mの巨大な鉄骨の構造物です。

今回の解体工事は、特に屋根を構成する鉄骨部材を降ろすことがとても難しい作業になりました。クレーンで吊して解体する時に、強風で大きく振られると修理の完了した本堂に接触してしまう恐れがあり、素屋根組立時に比べ失敗が許されない作業でしたが、組立



クレーンで鉄骨部材を解体しています

かいづか文化財だよりテンプス36号

平成21年1月30日発行

貝塚市教育委員会

〒597-8585 貝塚市畠中1丁目17-1

Tel (072) 433-7126 Fax (072) 433-7107

Email: shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

印刷 (株)和歌山印刷所

※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。

年4回発行：各1,000部

印刷単価：67.20円

見学会休止のお知らせ

見学会は、本堂の素屋根（工事用覆屋）解体のため、平成21年4月までありません。それ以降の予定は未定のため、今後のテンプスでお知らせします。

